



写真-1 東有年の大波止（令和3年5月撮影）

■ しっかりした石積みが残る船着場跡「大波止」

写真-1 は、江戸時代初期から大正時代にかけて、千種川を上り下りしていた高瀬舟の船着場跡で、「大波止（おおばと）」と呼ばれています。かつて千種川の川岸には、各所で高瀬舟の荷積みや荷下ろしをするための波止^{※1}（はと）が築かれ、村毎に高瀬舟を持ち、河口の赤穂城下との物資の輸送に利用されていました。下りは年貢米のほか製塩に必要な不可欠な燃料（薪）などが運ばれ、上りでは主に赤穂で生産された塩が運ばれていました。

使われなくなってからすでに 100 年以上が経過している大波止ですが、度重なる洪水にも耐えて石積みがきれいな状態が残っています。草刈りなどの維持管理もされていて、歴史的な施設を大切にする地元の熱意が伝わってきます。

※1 波止：陸から海へ細長く突き出して構築した堤。波よけや、船舶の積み荷の上げ下ろしなどに用いる。明治初期までは、波止もしくは波止場と称していたが、水面が静穏であることと同時に、荷役・輸送の機能が重視されるようになって、明治 22（1889）年の横浜港築港以後は「埠頭」の名が広く用いられている。

■ 交通の要衝として栄えた有年宿

有年宿（うねじゅく）は、西国街道の宿場町として賑わう一方で、千種川舟運の河岸としての機能も持っていました。有年川（現・千種川）を行き来する高瀬舟が荷を積み下ろす船着き場が左右岸にありましたが、今は右岸側の「大波止」「小波止（こばと）」の石積みが残るのみです。

① 大波止・小波止

千種川堤防に赤穂市教育委員会が建てた標柱には、「高瀬舟の荷積みや荷下ろしをするための大小の波止場が設けられていた。小波止は大水のため石積みがわずかとなっているが、大波止は現在も往時の姿を残している」と書かれて

います。現地を歩いていると、大波止は次頁の写真のようにしっかりと石積みが残っていてすぐにわかりましたが、小波止は見つかりません。地元のおじいさんに聴くと、「小波止は大波止の50mほど下流にあるけど、大波止に比べて低いし、石積みも洪水で流されて少ししか残っとらんわ」とのことで、言われたあたりを探してみましたが、残念ながら見つめることができませんでした。



写真-2 千種川右岸堤防から大波止を撮影



写真-3 大波止先端部から大波止を撮影

② 亀の甲跡

有年橋の東詰から上流へ 50m ほど行ったところに「亀の甲跡」と書かれた標柱が建てられています。そこには、「赤穂藩・浅野時代に、現在の有年橋東詰より上流約 100m の間に、千種川の護岸と高瀬舟の荷積み場を兼ねた石畳が築かれていたが、現在は河川改修のためその面影はない」と記されています。

図「西国往還渡船場普請絵図」は、文政 8(1825)年頃に千種川の渡し船の船着場の工事計画を描いた絵図で、代官所に（領主普請による補助申請のために）提出されたものです。

横方向に引かれた直線上には「西国往還通」と記されていますが、これが西国街道です。

この船着場は、渡船（渡し）と、揚場（高瀬舟の積み下ろし場）を兼ねているようです。

揚場は、洪水にも耐えられるように石が張られています。その張石の上流端に「御普請所」（工事箇所の意味）と記されていて、そこには張石に沿って「水刳枠（みずはなわく）」（水制工の一種で杭柵と思われる）の絵が描かれています。

これはおそらく水衝部の張石を洪水から守るために水制工を実施する計画図と思われます。

※2 榎原新田・森勝蔵様御領分：森勝蔵は、上総久留里藩（現・千葉県君津市久留里）の家老職を務めた。森宗家系の久留里森家の 8 代目。

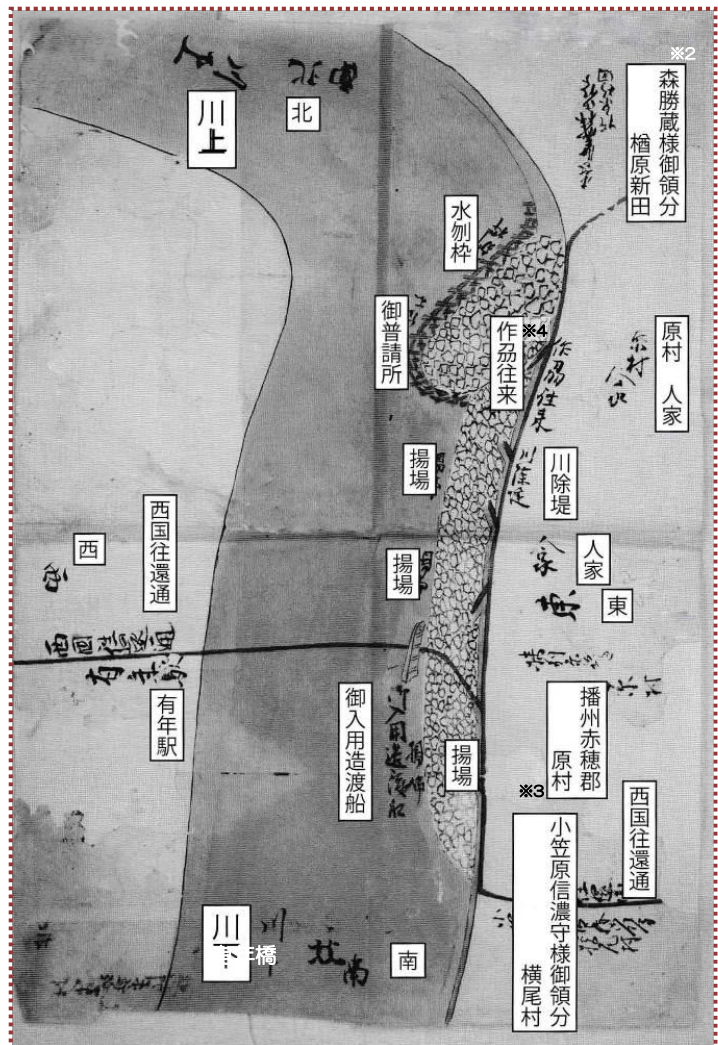


図-1 「西国往還渡船場普請絵図」（『有年考古・第7号』より引用）

※3 横尾村・小笠原信濃守様御領分：宍粟郡周辺を領有した安志藩の領地。小笠原家はかつて信濃国守護だったことから、初代以外の藩主は代々「信濃守」を名乗った。

※4 作劔往来：「劔」は「州」の異字体なので作州を意味し、作州は美作（みまさか）国（岡山県北部）の異称。つまり作州街道のことで、県内においては、現在の国道 373 号および 179 号に当たる。

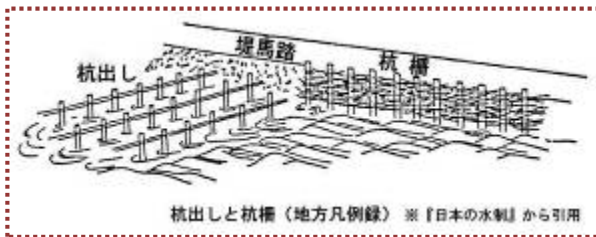


図-2 杭出しと杭橋



写真-4 有年橋上流の左岸堤防に建つ「亀の甲跡」の標柱

■ 千種川舟運の目印として設置された「高瀬舟灯台」

国道 2 号・東有年交差点のすぐ北の大鷹山中腹にある八幡神社の境内に、かつて千種川舟運の目印として設置された「高瀬舟灯台」があります。舟運の起点である久崎（現・佐用町）から河口の加里屋まで約 32km あり、下り 1 日、上りは 2 日要するそうです。河口から有年宿まで約 15km なので、有年宿はちょうど中間点に位置しています。朝、高瀬舟で加里屋を出ると、有年宿には夕方頃に着くと思われます。冬場であればすでに暗くなっているのに、航行の目印となる灯台が必要だったのでしょう。

加えて、川をさかのぼるのには、舳先につないだ綱を川岸を歩く船頭（曳き子）が曳くという方法をとりますが、これは大変な重労働です。舟の曳き方は、船頭が舟に乗って押上竿で舟を押し、曳き子（通常 2 人）が舳先につないだ綱を肩にかけて前かがみになって曳きました。川岸を歩く曳き子は、渾身の力をこめて舟を曳けるように、アシナカ（足半）と呼ばれるかかとのない草履を履きました。それほどの重労働なので、夕方、山の中腹に灯る灯台の明かりを見て、ほっとしたのではないのでしょうか。



写真-5 船着場があったとされる矢野川左岸部

写真-6 は、国道 2 号東有年交差点の 100m ほど南から灯台を望遠で撮影したものです。船頭ほどではないとしても、高瀬舟が運航している期間中、毎日山の中腹まで登って灯をともしのも大変だったと思います。手当はどうなっていたのでしょうか。まさかボランティア？

平成 30（2018）年、高さ約 5m の老朽化した灯台を地域のシンボルとして後世に残そうと、地元住民らがボランティアで修復、ボロボロになったトタン壁を焼杉板に取り替え、往時の姿をよみがえらせました。



写真-6 山野中腹に立つ高瀬舟灯台



写真-7 高瀬舟灯台



写真-8 自然石を載せた灯台頂部



写真-9 高瀬舟灯台から千種川を望む

灯台がいつ建てられたかは不明ですが、八幡神社に明治 10（1877）年に奉納された絵馬にはすでに灯台が描かれています。修復前に赤穂市教育委員会が調査したところ、現在のコンクリート製の土台の下に石垣が確認でき、トタン板を張る以前に使われていたとみられる古い杉板の破片が見つかったそうです。栗の木の心柱をはじめ内部に目立った傷みはなかったとか。

■ 矢野川の千種川合流点付近にも船着場跡があった

矢野川では、谷口村、有年原村、有年牟礼村（うねむれむら）が高瀬舟を所有していました。その関係からか矢野川が千種川に合流する地点付近に船着場跡があるということで、現地を歩いてみましたが跡を確認することはできませんでした。

ただ、赤穂鉄道^{※5}跡の法肩に「舟着き場跡」の標柱が赤穂市教育委員会によって建てられていて、そこには、「有年横尾は、江戸時代には安志藩^{※6}小笠原領に属していた。矢野川が千種川に合流する地点から約 100m 上流の山沿いに安志藩の舟着き場があった。」と記されています。



写真-10 赤穂鉄道跡の法肩に建てられた「舟着き場跡」の標柱



写真-11 船着場があったとされる矢野川左岸部

※5 赤穂鉄道：山陽本線の有年駅から播州赤穂駅（赤穂線の播州赤穂駅とは別駅）までの鉄道路線を運営していた鉄道事業者である。明治 23（1890）年に山陽鉄道が現在の山陽本線が通る山間部に敷設すると赤穂は鉄道ネットワークから取り残されたため、鉄道を同線の有年駅から赤穂町中心部まで敷設しようとする発案が幾度か挙がったが、いずれも予算問題で立ち消えとなっていた。しかし明治 43（1910）年に軽便鉄道法が公布されたことから、これを契機として軌間 762mm の軽便鉄道の敷設が決定され、大正 4（1915）年に会社を創設、大正 10（1921）年に開業した。戦後、山陽本線相生駅と接続する国鉄赤穂線が開業することになったため、昭和 26（1951）年に廃止となった。

※6 安志藩：譜代大名の藩で、藩庁として安志（現・姫路市安富町安志）に陣屋を置いた。享保元（1716）年、中津藩第 5 代藩主・小笠原長豊が夭逝し無嗣改易となったが、弟の長興が「祖先の勤勞」により安志に 1 万石で立藩を認められた。



図-3 東有年付近の地図

■ モノローグ

船着場跡である「大波止」を初めて見た時、あまりにきれいに石積みが残っているのでビックリしました。石積みもしっかりしているので、洪水に何度さらされても壊れることなく今日までその形が残っているのでしょう。地元の方が草刈りなど維持管理をしっかりとやっているようで、これほどきれいに残っている船着場跡は、おそらく千種川の中ではここだけだと思います。

では、この船着場は過去の遺物になっているのでしょうか。図-3 からわかるように、有年橋を通過した洪水が南の山にぶち当たり、跳ね返った流れがちょうど「大波止」に当たるようになっていて、水制工の役割も果たしているのではないのでしょうか。

スノーフレーク

ヒガンバナ科スノーフレーク属の多年草で、ヨーロッパ中南部原産。和名はオオマツユキソウ（大待雪草）。秋植の球根草で、春に白いスズランのような花が咲く。花弁の先端には緑の斑点がある。「大波止」下流の千種川河川敷に咲いていた。上流から球根が流れてきたものと思われる。似た名前でも同時期に咲くものにスノードロップ（マツユキソウ）という球根草もある。



写真-12 スノーフレーク

【参考資料】

- 1 『赤穂市史・第二巻』 赤穂市 昭和58年3月
- 2 『有年考古・第7号』 赤穂市教育委員会 令和2年3月
- 3 『赤穂市の歴史文化』 赤穂市教育委員会 HP
- 4 『高瀬舟灯台を修復』 赤穂民報 平成30年12月
- 5 『郷土史の説明板』 赤穂民報 平成24年2月
- 6 『日本の水制』 山本晃一 平成8年1月
- 7 『埠頭』 世界大百科事典
- 8 『久留里藩、赤穂鉄道、安志藩、スノーフレーク』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和3（2021）年10月 『ひょうご水百景』 No.135

改訂：令和8（2026）年 7月 『ひょうご水百景』 No.135